

鍔金獣帯鏡一面 りゅうきんじゅうたいきょういっめん

昭和13年2月14日、才園古墳群・2号墳から出土したもので、精緻な神獣文様と43文字の銘文が刻まれています。白銅鏡の背面全体に厚く金メッキが施され、大和朝廷当時の歴史をうかがう貴重な出土品として注目を浴びました。当初は5世紀前半ごろ製造されたと推定されましたが、その後2世紀から3世紀半ばにかけて製造されたものと位置づけられました。なお、この古墳からは他に、玉類、金環、馬具、銅鈴、鉄刀剣類、鉄鉋などが出土しています。

(国指定考古資料)



(実物大)

文化・歴史

今も息づく古(いにしえ)の夢物語



才園古墳群 さいぞんこふんぐん

元は4基の古墳があり、通称四つ塚とも呼ばれていましたが、現在では2基の古墳が残っています。2号墳からは、鍔金獣帯鏡一面のほか玉類、金環、馬具など多くの遺物が出土され、一括して国の重要文化財に指定されました。

(県指定史跡)



花のあるまち
アジサイ
(5月)

あさぎり町
町勢要覧 2004



みやはらかんのんとうほんとう
宮原観音堂本堂／**厨子**
相良三十三観音 29 番札所。16 世紀後半に建立されたといわれ、茅葺きの重厚さの中に優美な趣を残し、本堂、厨子ともに室町様式の貴重な建造物です。厨子には木造の聖観音菩薩像が安置されています。（県指定建造物）



すえすわじんじや
須恵諏訪神社
本殿は、一間社流造の板葺きで、16 世紀頃の建立といわれています。覆屋で保護されているので、保存状態は良好。（県指定建造物）



しょうやうすだいこおと
庄屋臼太鼓踊り

庄屋地区に伝えられているもので、その起源は不詳ですが、一説に平家の落人が都を偲んで神に奉納したのが始まりであるといわれています。優雅のうちに哀愁漂う踊りで、数ある太鼓踊りの中でも保存状態が良いことから、県の無形民族文化財に指定されています。（県指定無形民俗）

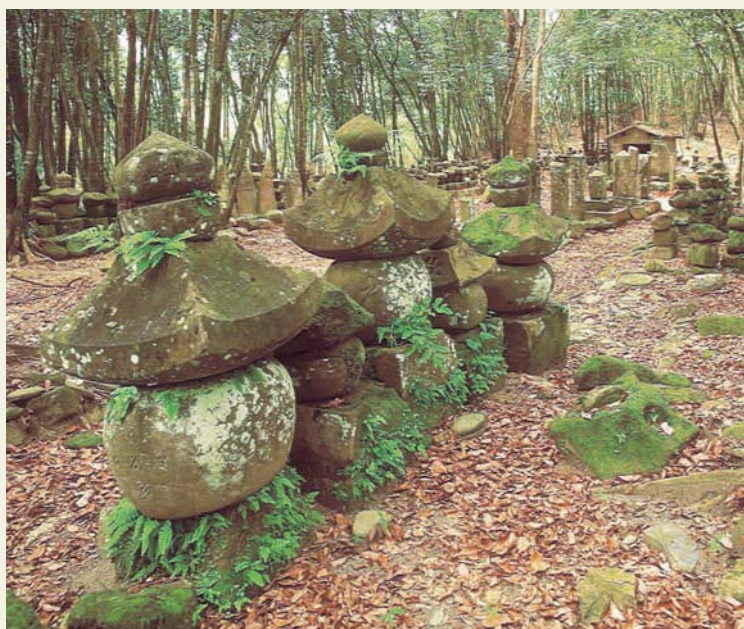
しょうふくじ
勝福寺
びしゃもんてんりつぞう
毘沙門天立像
立像としては、242・8 cm と県内最大級で、顔容はふくよか、鮮やかな彩色が施され、平安末期の様式が随所に見られます。（県指定彫刻）



おに かまこふん
鬼の釜古墳

直径約11m、高さ4.5mの巨石で構築された横石塚形式の横穴式円墳で、人吉球磨地方では最大の横穴式古墳です。数千年前の豪族の墓で、薩摩地方の影響がみられます。

(県指定史跡)



しょうふくじことうひぐん
勝福寺古塔碑群

毘沙門堂から西方向の山中にある数百基に及ぶ墓塔群。層塔、板碑型、駒型、角柱塔など種類も多彩ですが、その中の五輪塔は、球磨郡で最も古い弘安4年(鎌倉時代)の造立とされています。

(県指定史跡)

びやうどうじい こうしんやう
平等寺の庚申塔

像高1.1m、凝灰岩の五輪塔形式庚申塔で、郡内では珍しく、地輪には刻銘があります。北面に「梵字ア」、右に「庚申供養逆修」、左に「天文四年乙未十一月九日」の文字の他、僧侶、檀信徒の名が多数刻まれています。

(県指定有形民俗)



うえむらやきかまあと
上村焼窯跡

朝鮮の役凱旋の時、朝鮮半島から連れてきた陶工を住まわせ、この地で窯業が始まったといわれています。渋色を帯びた地味な釉薬を用い、茶壺を中心に、花瓶やすり鉢などが作られていました。今でもこの窯跡を地元の人は「壺屋」とよんでいます。

(県指定史跡)





花のあるまち
チューリップ
(2月～4月)

あさぎり町
町勢要覧 2004



誓願寺 木造阿弥陀如来座像

清願寺ダム下方にある誓願寺阿弥陀堂に安置されている像高88・5cm、木造の阿弥陀如来座像で、唐式の容貌と、胸部、衣紋の特徴から平安時代初期の作と推測されています。
(町指定彫刻)

築串六地藏

高さ1・49mで、台石の上に建てた八角柱の竿石に二重垂の坐石を冠せ火焰形の宝珠を載せた堂々たるもので、竿石の六面には錫杖をもった地藏立像が陰刻されています。
(町指定建造物)



谷水薬師

伝説によると、行基菩薩がお告げにより、堂宇を建て自作の如来像を祀ったのが始まりといわれています。日本七大薬師のひとつに数えられ、参道から境内に至るまで厳かな雰囲気包まれています。

また、本堂前の門に立つ仁王像は、その表情が隠れるほどの紙つぶてに覆われています。これは、嘔んで作った紙つぶてを仁王像に投げつけ、くっついた所の病が治るといわれ、年4回の大祭には大勢の人で賑わいます。
(町指定名勝)



上永里雲羽神社

永里城の城主・永里彦次郎が、永里村の鎮守のために建てたと伝えられています。流れ造りの社殿が町の文化財に指定されています。
(町指定建造物)



丸池のリュウキンカ

立金花(りゅうきんか)という漢字が示すように、春に黄金色の花が立ち上がつて咲きます。沼地や湿原に生育するキンポウゲ科の多年生の植物で、丸池の自生が南限となっています。

(町指定天然記念物)



壺形
(つぼ)



瓢箪形
(ひょうたん)



免田式土器

九州の広い範囲で出土された免田式土器は、弥生時代の後期に作られたと推測されます。上質で気品あるフォルム、表面に模様が刻み込まれ、それまでの弥生式土器の常識を覆しました。

(町指定考古資料)



平景清息女の墓

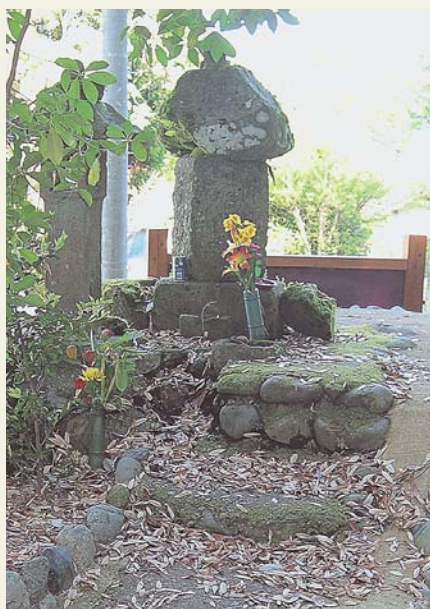
平景清の娘・糸清は、源平の合戦で敗れた父・景清を追って岡原にたどりつき、そこで父の死を知らされ、平家の旗を形見の短刀で切り裂き自害しました。この一件は江戸時代、人形浄瑠璃「娘景清八嶋日記」の中に登場しました。目の神様としてもご利益があります。

(町指定史跡)

おいちの墓

妊婦や子供の加護のため、六地藏を建立して祀ったといわれています。

(町指定建造物)





花のあるまち ヒメジョオン (5月)

あさぎり町
町勢要覧 2004



⑤こうした親孝行で働き者の市右衛門一家の善行は近隣でも評判を呼び、遂には人吉の殿様の知るところとなり、市右衛門夫婦とその息子夫婦は藩よりほうびの金子（きんす）と表彰状を賜りました。



⑥謙虚で親孝行を当たり前のように行っていた市右衛門は、藩からのほうびにいたく感激し、そのお礼として藩へ米三斗を5年間上納し、さらに一石五斗の米を上納しました。



⑦藩はこの行為を奇特として、息子の代まで2代にわたり「豊水」という苗字を許可しました。当時武士以外で名字が許されたのは、庄屋、御用商人など限られた人々で、農民の市右衛門には大変な名誉なことだったのです。



⑧この後も、市右衛門は養母が、当時としては長寿の80歳の天寿を全うするまで、変わらず養母を大事にしました。市右衛門自身も終生村人と仲よくつきあい、親孝行な二人の息子に大事にされ、家庭円満に余生を送ったということです。



①江戸時代の終わり頃、須恵村（現・深田）に市右衛門という百姓がおりました。

市右衛門は働き者で毎朝早起きをし、田畑を耕し、夜も暗くなるまで農作業に精をだしました。



②市右衛門には年老いた養母がおりましたが、朝起きるとすぐ養母の部屋へ朝のご機嫌を伺いに行き、履物を揃え、顔を洗う水を用意しお茶を入れ、そして丁寧に髪を梳（す）いてやっておりました。



③市右衛門が農作業などで外出する時は、家に残る養母のため近所に声をかけて出かけ、また養母の着るものから煙管（キセル）に至るまで、養母がいやな思いをしないよう細かく気を配りました。



④市右衛門には二人の息子がいましたが、この息子たち夫婦も親孝行な父を見習い、両親や祖母を大事にし、市右衛門一家は常に穏やかで温かい団楽を繰り広げていました。

孝子物語